

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

カナダ・イヌイット社会における海獣狩猟と分配を  
めぐる政治経済：  
ケベック州アクリヴィク村の事例から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北方文化振興協会 公開日: 2015-03-23 キーワード: 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008513">http://hdl.handle.net/10502/00008513</a>

# The Political Economy of Hunting and Sharing Marine Mammals in a Canadian Inuit Society: A Case Study from Akulivik, PQ.

Nobuhiro KISHIGAMI  
National Museum of Ethnology

カナダ・イヌイト社会における海獣狩猟と分配をめぐる政治経済：  
ケベック州アクリヴィク村の事例から

岸上 伸啓  
国立民族学博物館

The aims of this paper are to describe the present conditions of marine mammal hunting and sharing activities among the Nunavik Inuit of Canada and to discuss the social-cultural significance of these activities to them. Nunavik Inuit hunting activities are constrained by both economic and legal factors. For example, the negative factors are the purchase of expensive gas and ammunition and federal regulations, which govern the timing of the hunt and the number of animals that can be taken. On the other hand, the Inuit often make use of the Nunavik Hunter Support Program instituted under the James Bay and Northern Quebec Agreement to carry out their hunting and sharing activities. Inuit's use of this kind of program is a positive factor to facilitate the activities. Thus, the Inuit organize and practice subsistence activities under particular political and economic circumstances. In this paper, however, I argue that these same activities are in fact not only economic but also contributors to the construction of indigenous social relationships and cultural identities, and thus contribute significantly to the development of emerging Inuit lifestyles in a rapidly changing world. Also, I insist that the contemporary Inuit use subsistence activities themselves as a multi-effective resource.

Keywords: Canadian Inuit, Marine Mammal Hunting, Sharing, Political Economy, Resource  
キーワード：カナダ・イヌイト、海獣狩猟、分配、政治経済、資源

## 1. はじめに

人間社会を理解するための視点は複数存在している。本稿では、ポリティカル・エコノミー(Political Economy)の視点から、カナダのヌナヴィク・イヌイトの海獣狩猟と獲物の分配について紹介し、それらの意義を検討する。

ポリティカル・エコノミー研究では、地域共同体が資本主義の拡大の影響のもとでいかに形成されてきたかが検証されてきた(Schneider and Schneider 1976; Wolf 1982; Mintz 1975; ミンツ 1988)。そして所与の社会の内的な要因よりも、それをより大きな政治経済的かつ歴史的な脈絡に位置づけることにより、その社会の変化を理解しようとしてきた。それらの研究では、地域共同体の成員の主体性が欠如したものとして取り扱われ、周辺社会の変化が資本主義の浸透という外からの力によって一方的に生み出されるかのように描き出される傾向が認められる(Ortner 1984; Roseberry 1988; 岩崎 2002)。しかしながら世界各地において資本主義の浸透に対し地域住民はさまざまなやり方で主体的に対処してきた(例えば、Nash 1994; 1998a, b; 前川 2000)。すな

わち、現実の社会変化は、外と内との相互作用や混交作用の中で生じた過程の一部であった。

ここでは、現在のイヌイトの海獣狩猟や分配を、毛皮交易や貨幣経済、国際市場との関係に着目しながら検討したい。なお、ここでは私の調査地であるカナダ・ケベック州極北地域(ヌナヴィク)のアクリヴィク(Akulivik)村のイヌイトの海獣狩猟と、獲物や食物の分配(以下、分配と略称)を事例とする。

## 2. カナダ・イヌイト社会への貨幣経済の浸透

カナダの東部極北地域におけるイヌイトと毛皮交易や国家、国際市場との関係が密接になったのは、20世紀にはいつからといつまでよいだろう。

1910年代からハドソン湾会社などがホッキョクギツネの毛皮を求めて、極北地域の各地に交易所を設立した。冬になるとイヌイトはホッキョクギツネのワナ猟を行い、それでえた毛皮を交易所に持って行っては、その見返りとして小麦粉やビスケット、紅茶、ハチミツ、ライフル、針、ヤカン、ナイフ、カヌー、布地などを入手した。当初、この交易は両

者に利益をもたらしたが、その一方で、イヌイットは毛皮交易とますます深く関わるようになった。彼らの経済生活には、生業的活動と商業的活動が混在するようになった。

1920年代から、第2次世界大戦のために高級毛皮の市場が崩壊する1940年代までは、交易品の毛皮はおもにホッキョクギツネであった。ところが1961年にノルウェーでアザラシの毛皮をなめす技術が開発されると、ワモンアザラシやアゴヒゲアザラシ(以下ではアザラシと総称する)の毛皮が交易品に加わった。イヌイットはアザラシを捕獲し、その肉や脂肪は分配して食料とし、毛皮は売って現金を稼いだ。その現金でガソリンやライフルの銃弾、スノーモービルなど狩猟・漁労活動に必要な道具や物資を購入し、狩猟・漁労活動を続けた。このように貨幣経済と生業活動は共存しえたのであった。さらに1960年代に定住化がすすむと、政府支出の各種の生活補助金や賃金労働からの収入、滑石彫刻や版画などの制作、販売からえた収入が加わり、イヌイットはそれらの現金収入を利用しながら狩猟・漁労活動を行った。この時期には、スノーモービルや船外機付きカヌー、モーターボートが導入され、狩猟・漁労活動の機械化が進んだ。

ところが1983年10月に、ECは動物愛護運動の影響を受けてアザラシの毛皮の全面的な輸入を禁止した。それまでフランスなどのヨーロッパ諸国は毛皮服のファッションの中心であったが、その市場が崩壊してしまっただけである。このためイヌイットはアザラシの毛皮を売り、現金を得ることができなくなった(Wenzel 1991)。さらに1980年代後半には、イヌイットの滑石彫刻や版画なども売れ行きが鈍った。このような状況のもとで、狩猟・漁労活動に投入できる資金が減少したために、狩猟・漁労活動が沈滞し始めた。その結果、狩猟・漁労活動や食物分配の頻度の低下をまねき、さらに社会関係にまで影響が及ぶこととなった(Wenzel 1991)。

一方で、村の生活の中で現金が占める役割は、年々増大し、多くの成人は定職につくことを望むようになった。また、極北地域の貨幣経済においては、カナダ政府や準州政府、州政府などの経済的な重要性が増してきた(Chabot 2003; Duhaime et al 1999)。

現在の極北地域の経済の現状を整理すると次のようになる。第1に、現在の極北地域の経済は政府支出の資金によって成り立っている。第2に、現在の狩猟・漁労活動に必要な道具や物資は、現金によってイヌイット社会外から購入されなければならない。現金という基準のみからみれば、現在の狩猟・漁労活動は経済的に持続可能であるとはいえない。第3に、極北地域の混交経済の中で貨幣経済の方が、生業経済よりも重要になっている。第4に、イヌイットの人口が急増している一方で、村の中の賃金労働の職はあまり増加していない。

このような条件下で、イヌイットは狩猟・漁労活動に従事しているのである。ここで強調しておきたい点は、このような現状にもかかわらず、狩猟・漁労活動や食物の分配・消費活動からなる生業活動はイヌイット社会においてはきわめて重要な社会・文化・経済的な活動であることである。では、なぜ海獣狩猟および獲物や食物の分配がイヌイットにとっ

て重要であるのかをポリティカル・エコノミーの視点から紹介し、検討してみたい。

### 3. 現代の海獣狩猟と分配

#### 3.1 政治経済的な条件と社会生業システム

毛皮交易という歴史条件のもとで、イヌイットは貨幣経済と生業経済を混交させた「社会生業システム」と呼ぶことのできる経済システムを形成してきた。ここでいう生業活動とは、獲物の捕獲、分配、消費からなる活動である。イヌイットの生業活動は現金収入を前提として成り立つ一方で、その活動は拡大家族という親族関係によって組織され、実行された。さらに生業活動は、イヌイットの世界観や価値観と表裏一体の関係にあった。すなわち、彼らの生業活動が貨幣経済に接合されていても、生業活動の持続とイヌイットの社会関係の再生産、世界観や価値観の持続は相互に依存しあう三位一体的な関係を形成していたといえる。これを図示すれば、図1のようになる。

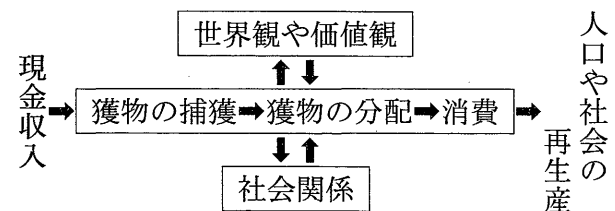


図1 毛皮交易期に形成されたカナダ・イヌイットの社会生業システム

このシステムの一部に変化がおきると、それ以外の部分、そして最終的にはシステム全体が変化することが予測される。

#### 3.2 アクリヴィク村の経済:賃金労働と狩猟・漁労

現在のアクリヴィク村の経済は、賃金労働と狩猟・漁労との混交によって成り立っている。次に、村の賃金労働と狩猟・漁労について述べたい。

1996年当時のアクリヴィク村の職業は、ほぼ次のようである。村役場関係の定職は、村長1名、秘書2名、村の総合マネージャー1名、会計係2名、住宅係2名、福祉係1名、配水係2名、配油係2名、ゴミ収集係2名、し尿収集係2名、修理係1名、リクリエーション係1名がいる。村役場関係のパートタイムの仕事として季節的な土木・建築関係の仕事が複数、6名の村会議員の仕事がある。生協には、総支配人1名、購買マネージャー1名、会計2名、在庫係2名、レジ係2名、ガソリン販売1名など計9名がいる。このほかに生協のホテルや荷役といった臨時の仕事が複数ある。学校関係には、イヌイット以外のカナダ人の教師が6名、イヌイットの教師が5名、秘書が2名、教育長1名、用務員1名がいる。さらに学校における掃除などのパートタイムの仕事が複数ある。発電所には常勤1名と非常勤1名がいる。郵便局員は常勤1名、エアー・イヌイット社は常勤2名、空港管理・整備の仕事と気象予報の仕事についているイヌイットが3名である。看護所にはフランス系カナダ人の看護師2名、イヌイットの通訳1名、パートの掃除係1名がいる。これ以外

にも、マキヴィクやカティヴィク地方政府関係のパートタイムの仕事が複数ある。また、エコツアーや小型商店を営むイヌイットがいる。アクリヴィク村でイヌイットが働くことができる実際の定職の数は、約45あまりで、村全体の世帯数約90世帯（うち15世帯は1人世帯）より少ない。定職とパートの職をあわせれば130人あまりの人が何ならかの形で、現金収入を得ている。1996年の村の失業率は10.3%（ケベック州全体は11.8%）であった。アクリヴィク村の成人の平均年収は約16500ドル（ケベック州全体は約23200ドル）であった。夫婦あわせでの年収の平均は、38500ドル（ケベック州全体は約53200ドル）であった。アクリヴィク村の個人も家族もケベック州の平均の7割程度の収入である。極北地域では、物価がカナダ南部と比べ約1.5倍と高いため（表1）、生活は決して楽ではない。

表1 ヌナヴィク地域とケベック市での食品価格の比較（\$はカナダ・ドル）

	ヌナヴィク地域	ケベック市
牛肉(1kg)	\$ 7.95	\$ 5.52
リンゴ(1kg)	\$ 2.84	\$ 2.40
ポテト(10lbs)	\$ 7.18	\$ 3.17
バター(454g)	\$ 4.34	\$ 3.17
タマゴ(12個)	\$ 3.11	\$ 1.78
ミルク(1l)	\$ 2.72	\$ 1.38
食パン(675g)	\$ 1.99	\$ 1.46

出典(Duhaime, et al. 2000:10)

村で定職についている成人男性は、週末か祝日、長期休暇中、就労時間後にしか狩猟・漁労に従事することができない。これらの人々が狩猟・漁労活動に従事する時間はそれほど多くはないが、現金収入があるために性能がよいスノーモービルや高性能ライフルを持っており、狩猟・漁労の効率は決して悪くはない。皮肉なことに、現金収入がない中高年は十分な装備やガソリンを買うことができず、狩猟・漁労に行きたくても行けないことがある。

現在のイヌイットは、生活のすべての面において現金が必要であり、重要であることをはっきりと認識している。従って、子供たちにはしっかりした教育を受け、高収入の定職につくことができることを親たちは希望しており、イヌイットの仕事観も変わりつつあるのである。

アクリヴィク村のイヌイットは、カナダ南部から空路や海路で搬入されてくる加工食料品を大量に消費している一方で、地元で捕ることができる海獣や陸獣、魚類、鳥類を食料資源として利用している。1990年代後半の1年の生業活動の周期は次の表2に示すとおりである。

この表2をみてわかるように、アクリヴィク村のイヌイットは、氷雪がのこる春にはワモンアザラシ、ライチョウ、カリブー、内陸の湖でホワイトフィッシュや陸封ホッキョクイワナをおもに捕獲している。夏には、ホッキョクイワナ、カナダガン、ハクガン、カモ、セイウチを捕獲し、ベリー類を採集する。秋にはワモンアザラシやシロイルカを捕獲

表2 アクリヴィク村の狩猟漁労活動の1年(1999年現在)

	月(1年)											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
おもな捕獲対象物												
ホッキョクイワナ	○	○	○	○	○	○	◎	◎	○	○	○	○
陸封ホッキョクイワナ	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	◎
ホワイトフィッシュ	◎	◎	○	○	○	○				○	◎	◎
ワモンアザラシ	○	○	◎	◎	◎	○	○	○	○	◎	○	○
アゴヒゲアザラシ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○
シロイルカ						○	○	○	○	◎		
セイウチ								○	◎			
ホッキョクグマ	◎	◎	○	○	○	○	○				◎	◎
カリブー	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	○
ハクガン						○	○	○	○			
カナダガン					○	○	○	○	○			
カモ類					○	○	○	○	○	○		
カモ類の卵						○	○					
ライチョウ	○	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○
ベリー類								○	○			

(注) 網掛けは中心的な捕獲物(食料)を示す。○は捕獲期、◎は捕獲の最盛期を示す。

し、冬には陸封ホッキョクイワナ、ホワイトフィッシュ、ホッキョクグマ、カリブーを捕獲している。これらは、イヌイットの食料となる。

### 3.3 シロイルカ、セイウチ、アザラシ

アクリヴィク村のイヌイットが捕獲するおもな海獣は、アゴヒゲアザラシとワモンアザラシ、セイウチとシロイルカである。

アザラシ類はアクリヴィク村の周辺の海域や海水上からほぼ1年中、捕獲することができる。一方、セイウチとシロイルカはアクリヴィク村の周辺ではあまり捕獲できず、100km以上はなれたハドソン海峡地域まで行かなければならない。

ここでは、これらの海獣がどのように捕獲され、分配されているかを紹介する。

#### 3.3.1 シロイルカの狩猟と分配

シロイルカは夏から初秋にかけてアクリヴィク村の近海を北上し、越冬地であるハドソン海峡へと向かう。2001年までは近海を回遊するホッキョクイワナを船外機付きカヌーで追い、捕獲していたが、2002年から新たな資源管理体制が開始された。この新体制ではハドソン湾東部沿岸でのシロイルカは全面的に禁止され、ハドソン海峡において年間15頭以下の捕獲が許可されたのみであった(岸上 2003a: 110-111)。このため、現在では、毎年10月に村がハンター・サポート・プログラムの資金を利用し、6名のハンターを大型ボートでハドソン海峡に派遣し、シロイルカを実行している。

捕獲されたシロイルカのマツタック(脂肪付きの皮部)と肉は、村の役人によって全世帯に平等に分配されている。

#### 3.3.2 セイウチの狩猟と分配

セイウチは夏から秋にかけてハドソン海峡のサリ

スベリー島などに集まる。狩猟地はアクリヴィク村から100km以上は離れているため、ハンター・サポート・プログラムを利用した大型ボートの狩猟遠征が可能になるまで、行われていなかった。

毎年9月ごろにアクリヴィク村はハンター・サポート・プログラムを利用してハドソン海峡にある島に大型ボートを派遣し、狩猟させている。セイウチの肉は、それを欲する村人に分配されている。村人は、世帯ごとに石積み貯蔵庫をつくり、その中でセイウチの肉を数ヶ月寝かせ、イグナーク（発酵肉）を作り、冬の食料としている。

### 3.3.3 アザラシの狩猟と分配

アザラシの捕獲には、(1)氷上で日光浴をしながら寝ているアザラシを捕獲する春のアザラシ猟、(2)夏から秋にかけての海上でのアザラシ猟、(3)冬の不凍海域でのアザラシ猟、(4)冬の海水上の呼吸穴でのアザラシ猟などがある。

(4)はもともと集団猟であったが、現在では数人のハンターによって行われる。アザラシ猟は機械化が進んだ結果、ほとんどの場合、2、3人以下の少人数で行うことができるようになった。獲物はハンター間で分配された後、獲物の肉は、おもに拡大家族集団内で分配されていく。

### 3.3.4 海獣狩猟と獲物の分配

現在のアクリヴィク村では、海獣狩猟を行うためにはハンター・サポート・プログラムの資金か個人の現金を利用することが必要である。また、資源保護のために、シロイルカについてはクォータ制度が導入されており、イヌイットは自由に捕獲することができない状態にある。現在の海獣狩猟活動にはかなりの制限が課せられている。

ハンター・サポート・プログラムの資金を利用した海獣狩猟では、獲物の肉や脂肪は村人に平等に分配される。一方、個人の資金を利用した海獣狩猟では、狩猟に参加したハンター間で分配された後、捕獲量が多い場合には、村人へと分配される。そしてどちらの場合でも、ひとたび肉や脂肪が村人の所有になると、余裕がある限りおもに拡大家族関係に沿って繰り返し分配される<sup>(1)</sup>。ここで重要な点は、獲物の分配は拡大家族関係に沿って行われており、その実践はその関係の再生産を生み出していることである。

## 4. 検討

### 4.1 ヌナヴィク地域における社会経済開発の基本方針とハンター・サポート・プログラムによる生業活動の活性化

イヌイット社会では、生活の志向について多様化が進んでいる。生業活動を望む者もいれば、賃金労働を望むものもいる。このような状況の中で、ヌナヴィク地域の政治リーダーたちは、単純に職を増やし、個人所得を増大させる経済開発ではなく、地元にある食料資源や制度を文化的に持続可能なやり方で活用する社会経済開発の必要性を主張している。

ヌナヴィク地域ではマキヴィクやカティヴィク地域政府、ケベック州政府が「ジェームズ湾および北ケベック協定」(The James Bay and Northern

Quebec Agreement)(1975)のもとで、1984年から狩猟・漁労活動を活性化するための「ハンター・サポート・プログラム」を実施している。このプログラムのもとでケベック州政府はヌナヴィク・イヌイットの狩猟・漁労活動を促進させるために、カティヴィク地方政府を經由して各村に補助金を提供している。例えば、アクリヴィク村では、毎年変動があるものの1年あたり平均14万カナダ・ドルあまりを受け取り、その資金を利用して村用の大型ボートを購入し、セイウチ猟遠征やシロイルカ猟遠征を実施し、獲物を村人に無料で提供している。さらにハンターからアザラシやホッキョクイワナを買い取り、食料の必要な世帯に無料で提供している。

### 4.2 狩猟・漁労や分配の意義

現代のイヌイットにとって狩猟や漁労は経済的な利潤を生み出すことはない。むしろ手元にある現金や補助金を利用しながら狩猟・漁労活動を続けている。ここではアクリヴィク村のイヌイットの事例にもとづいて、狩猟・漁労や食物分配の意義を、イヌイットの視点と外部の視点から検討してみたい。

まず、イヌイットの視点から狩猟や漁労、分配の意義を検討してみよう。

第1に、狩猟や漁労でえた肉や魚のカロリー摂取量は、全体の3分の1程度であるにもかかわらず、「真の食べ物」(niqituinnaq)とみなしている。それらを食べることに満足感を得ている。狩猟や漁労は「真の食べ物」を獲得するための重要な活動であると考えている。

第2に、ほかの人とともに狩猟や漁労に参加し、獲物をほかの人と分かち合うことに満足感を感じている。とくに多くの獲物を取り、それらを村人と分配するハンターは、この行為を通してハンターとしてのプライドや社会的な名声を得ている。

第3に、狩猟や漁労に従事するイヌイットは、彼らの海や海上で行われる活動として、それを行うこと自体に文化的な満足感を得ている。イヌイットは、狩猟や漁労に出かけ、従事すること自体や、村からはなれ狩猟・漁労場やキャンプ地で時間を過ごすこと自体に満足感を見出している。

以上のようにイヌイットの視点から見ると、狩猟・漁労活動や分配は彼らの文化的な満足感を満たす活動であるということができよう。

一方、外部の視点にたつと、狩猟・漁労や食物分配の意義や特徴を指摘することができる。先に紹介した社会生業システムは、実質的に毛皮交易が終焉を迎えた1984年以降、急激な変化を余儀なくされてきた(Wenzel 1991)。現代のイヌイットの狩猟・漁労活動は、食料を獲得するためだけの活動ではない。スチュアート(1996)やスターン(Stern 2000)は狩猟・漁労活動がレジャー化してきている点を指摘している。スチュアートは、機械化されたイヌイットの狩猟・漁労活動が経済的に重要であるよりも、国家や世界システムの中でアイデンティティの維持など文化的なサバイバルと深く関わっていることを指摘している(スチュアート 1995; 1996)。また、イヌイットは狩猟活動をイヌイットのイメージや民族表徴として利用していることを指摘している(スチュアート 1998; Stewart 2002)。すなわち、狩猟・漁労に携わるハンターとしてのイ

ヌイットのイメージは、対国家や対国民にとって先住民という重要な政治的な立場の強力なメッセージ性を有している。大村は、イヌイットは狩猟や漁労など日々の実践を通してポジティブな自己イメージを作り出している点を指摘している(大村 1998; Omura 2002)。

現在のアクリヴィク村では定職の数が少なく現金収入が限られている。しかもヌナヴィク地域では物価が高いために、現金で購入されるマーケット食品だけに常時依存することは経済的に難しい(表1)。したがって狩猟や漁労の産物を活用すべきであるという見解が成り立つ。さらに多くのマーケット食品は高加工脂肪分、高塩分、高糖分、高炭水化物という特徴を持っており、これらへの依存こそがイヌイットの健康問題の元凶であるので、イヌイットは多様な栄養分に富む地元の産物を食料資源として活用すべきであるというも存在している(表3)(岸上 2003: 265-206)。

表3 動物の部位とそこに含まれるおもな栄養素

部位	おもな栄養素
アザラシやカリブーの肉	タンパク質、鉄分
シロイルカの脂肪	脂肪、ビタミンA、ビタミンC
シロイルカのマッタック	亜鉛、ナトリウム、ミネラル類、ビタミンC
シロイルカの油 (長時間ねかせたもの)	ビタミンA、ビタミンE
イッカクのマッタック	ビタミンC
イッカクの脂肪	脂肪、ビタミンA、ビタミンE
カリブーの肝臓	ビタミンA、ビタミンE、ビタミンB2、 ビタミンB6、葉酸
カリブーの脂肪	脂肪
カリブーの乾燥肉	ミネラル類
ワモンアザラシの肝臓	ビタミンA、ビタミンE、ビタミンB2、 ビタミンB6、ビタミンC、葉酸
淡水魚の卵と肝臓、カモの卵	脂肪酸
ワモンアザラシの脳部	脂肪酸、ビタミンC

(Kuhnlein 2000 をもとに作成)

アクリヴィク村で日常的に実践されている食物分配は、イヌイットの親族関係を維持、再生産させ、かつ親族意識や村人意識、イヌイット意識の構築に役立っている(Kishigami 2000; 2004)。また、獲物や食物の分配の制度は、食料を持っていない人にとってとくに有利に働く。現代のイヌイット社会のように生活が苦しい状況下では、分配の制度は人々の経済的な適応の向上に貢献しているといえよう。

アクリヴィク村を事例として、現在の海獣狩猟をポリティカル・エコノミーの視点から見てみると、法的な規制を受けているうえに、ガソリンやライフルの弾丸の購入など現金の使用なしには実行できない活動であることがはっきりしている。またイヌイットにとって狩猟・漁労活動や分配は、その内容に変化が見られ、頻度が落ちている。しかしながら、それらの活動は現代の政治経済的な脈絡においては社会的、経済的、文化的、政治的、さらに栄養

学的に意義がある活動であると私は主張したい。イヌイットは狩猟・漁労活動や分配を多機能や複合的な効果をもつ資源として利用しているのである。したがって生業活動を経済性に欠けるといふ指摘は、現在の政治経済的な脈絡では生業活動の側面を見ているにすぎない<sup>2)</sup>。彼らの生業活動をひとつの特徴や機能のみから理解することや分析することだけでは十分ではないといえよう。

## 5. 結論

1960年代以降、カナダのヌナヴィク地域のイヌイットは、国民国家や国民経済、さらには世界経済に以前よりも急激に接合され、統合されてきた。彼らの生活は、基本的に外部からもたらされる資金と物資に依存する貨幣・生業混交経済のうえに成り立っている。カナダ南部からもたらされるマーケット食品の量や割合が増大しつつあるうえに、狩猟・漁労活動を行うためには、現金が不可欠であるという現状の中で、イヌイットは狩猟・漁労活動や分配を行っている。

本稿では、そのような状況下にあるイヌイットの海獣狩猟活動と分配活動の意義を、イヌイットの視点と外部の視点から検討してみた。そしてそれらの活動が、現代のイヌイットにとって文化的、栄養学的、経済的、社会的、政治的に意義のある活動ということを描いた。現在のイヌイット社会では狩猟・漁労活動は、たんなる食料資源を獲得するための活動ではなく、生業活動(狩猟・漁労と分配、消費)そのものが、イヌイットによって多機能や複合的な効果をもつ資源として利用されているのである。

## 注

- (1)イヌイットの獲物や食物の分配については、岸上(2003b; 2004a, b)を読みたい。  
 (2)ジューン・ナッシュ(Nash 1994)は、資本主義化や経済のグローバル化が進展しても、危機的な条件下にある人々の間では生業活動は生きていくうえで重要であるという。彼女は、資本主義に統合された経済下でも生業活動は存続すると主張している。

## 引用文献

Chabot, M.

2003 Economic Change, Household Strategies, and Social relations of Contemporary Nunavik Inuit. *Polar Record* 39(208): 19-34.

Duhome, G. et. al

1999 *The Economic Structure of the Nunavik Region (Canada): Changes and Stability*. GETIC, Laval University: Quebec.

2000 *Nunavik Comparative Price Index*. GETIC, Laval University: Quebec.

岩崎まさみ

2002 「文化理論の変遷とカナダ先住民研究への応用」『北海学園大学人文論集』22: 1-34.

- 岸上伸啓  
 1998a 「世界システムの中のカナダ・イヌイト：毛皮交易を中心に」 煎本孝編『周極地域諸文化の比較研究:言語・生態・世界観』(平成7年度一平成9年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(1)研究成果報告書). pp.38-48. 北海道大学文学部:札幌.  
 1998b 『極北の民 カナダ・イヌイト』 東京:弘文堂.  
 2000 Contemporary Inuit Food Sharing and Hunter Support Program of Nunavik, Canada. In G.W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds.), *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies no.53). pp.171-192. National Museum of Ethnology: Osaka.  
 2002 「カナダ極北地域における海洋資源の汚染問題:その現状と文化人類学者の役割」『国立民族学博物館研究報告』27(2):237-281.  
 2003a 「カナダ極北圏ヌナヴィク地域におけるシロイルカ資源の共同管理について」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』(国立民族学博物館調査報告46). pp.101-129. 国立民族学博物館:大阪.  
 2003b 「狩猟採集民社会における食物分配の類型について」『民族学研究』68(2):145-164.  
 2004a Contemporary Inuit Food Sharing. Paper read at the 5th International Congress of Arctic Social Sciences (ICASS V). University of Alaska, Fairbanks May 22, 2004.  
 2004b A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.
- Kuhnlein, H.  
 2000 Nutrient Benefits of Traditional/Country Food Consumed by Inuit. In S. Kalhok (ed.), *Synopsis of Research Conducted under the 1999-2000 Northern Contaminants Program*. pp.50-57. Indian and Northern Affairs Canada: Ottawa.
- 前川啓治  
 2000 『開発の人類学:文化接合から翻訳的適応へ』新曜社:東京.
- Mintz, S. (シドニー・W・ミンツ)  
 1975 The So-called World System: Local Initiative and Local Response. *Dialectical Anthropology* 1(2):253-270.  
 1988 『甘さと権力:砂糖が語る近代史』(川北稔・和田光弘訳)平凡社:東京.
- Nash, June  
 1994 Global Integration and Subsistence Insecurity. *American Anthropologist* 96(1): 7-30.
- 大村敬一  
 1998 「カナダ・イヌイトの日常生活における自己イメージ:‘イヌイトのやり方’と‘戦術」『民族学研究』63(2):160-170.  
 2002 Construction of Inuinnaqtun (Real Inuit-way): Self-Image and Everyday Practices in Inuit Society. In STEWART, Henry, Alan BARNARD and Keiichi OMURA, (eds.), *Self- and Other - Images of Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies no. 60). pp.101-111. National Museum of Ethnology: Osaka.
- Ortner, S.  
 1984 Theory in Anthropology since the Sixties. *Comparative Studies in Society and History* 26:126-166.
- Roseberry, William  
 1988 Political Economy. *Annual Review of Anthropology* 17:161-185.
- Schneider, J. and P. Schneider  
 1976 *Culture and Political Economy in Western Sicily*. Academic Press: New York.
- Stern, P.  
 2000 Subsistence: Work and Leisure. *Études/Inuit/Studies* 24(1):9-24.
- スチュアート ヘンリ  
 1995 「現代のネツリック・イヌイト社会における生業活動:生存から文化的サバイバルへ」『第9回北方民族文化シンポジウム報告』pp.37-68. (財)北方文化振興協会:網走.  
 1996 「現在の採集狩猟民にとっての生業活動の意義」スチュアートヘンリ編『採集狩猟民の現在:生業文化の変容と再生』pp.125-154. 言叢社:東京.  
 1998 「民族呼称とイメージ(イヌイト)の創成とイメージ操作」『民族学研究』63(2):151-159.  
 2002 Ethnonyms and Images: Gnesis of the 'Inuit' and Image Manipulation. In STEWART, Henry, Alan BARNARD and Keiichi OMURA, (eds.), *Self- and Other-Images of Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies no. 60). pp.85-100. National Museum of Ethnology: Osaka.
- Wenzel, G.  
 1991 *Animal Rights, Human Rights: Ecology, Economy and Ideology in the Canadian Arctic*. University of Toronto Press: Toronto.
- Wolf, E.  
 1982 *Europe and the People without History*. University of California Press: Berkeley.